

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成出来たか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
朝霧中学校区	「認知症です」と言えるまちづくり	・認知症当事者や家族の思いを知る講座を開催、住民が自分事として考える機会をつくった。	認知症	・コープ朝霧で買い物支援講座を開催、認知症当事者：ピアサポーターが参加、当事者の思いを知る機会となった。	・認知症当事者の思いを聞く機会は少なく、特別なことではなく普通に接すること、今後も伝え継続していく大切さを再確認した。	・認知症や高齢者の困りごとを自分事として考え、助け合える地域となる。	・認知症理解促進のため、勉強会を継続し、認知症当事者の協力を得て認知症啓発活動を行う。	継続	認知症の当事者の声や思いを生活場面、具体的な事例を用いることで、住民への理解がひろがる、今後も継続して取り組んでいただければと思います。 認知症の啓発活動についてもキャラバンメイト、シルバーサポーターと協働し活動の支援を行っていただきたい。
		・小学校と連携し子ども向けオレンジサポーター養成講座を開催、子どもを通じて保護者世代への啓発を行った。	生活支援体制整備	・松が丘小学校、朝霧小学校4年生を対象にオレンジサポーター養成講座を開催、松が丘小学校は脳活楽習＆体操グループ「カラフル」と児童の交流につながった。	・子ども達だけでなく教職員の理解が進み、福祉と教育の連携が出来た。子どもがオレンジサポーター養成講座を受け、地域住民の認知症理解を進める大きな力となった。	・小学生が認知症について学ぶことで地域内の子どもや保護者等の認知症理解が広がる。	・小学校と連携した認知症啓発活動を継続すると共に中学校、高校へオレンジサポーター養成講座開催の働きかけを行う。		
		・居宅介護支援事業所の巡回訪問を通して出た意見をもとに民生委員・児童委員と介護支援専門員の交流会を行った。	包括的継続	・10月松っ子まつりにキャラバンメイト・シルバーサポーターと共に参加し、オレンジリングレンジャーと共に認知症啓発活動を行った。	・12月朝霧地区民生児童委員協議会と介護支援専門員の交流会を開催、連絡先情報シートの交換を行った。	・住民が思い描く、認知症の人にやさしいまちを形作ることが出来る。	・若い世代への啓発方法を考える。	継続	民生委員・児童委員と介護支援専門員が顔の見える関係性作りを行い、住民の困りごと、認知症の早期発見につながるよう今後も継続していただきたい。
		・高齢化率が高い地区へ消費者被害予防の啓発活動を行った。	生活支援体制整備 権利擁護	・朝霧・大蔵地域住民対象に消費者教育の啓発講座を4回開催した。	・認知症、判断能力が低下してきた際、地域全体で詐欺被害防止の取り組みを行う必要性を感じていると分かった。	・住民の生活の困りごと、認知症の相談が早期に相談することが出来る。	・民生委員・児童委員と介護支援専門員が直接連絡を取りあえる関係性をつくる。		
		・自治会長等へのセンターの役割の周知を行った。	総合相談	・集いの場、高年クラブ、まち協、自治会町内会等に広報誌を使いセンターの取り組みを紹介した。 ・東朝霧丘町内会、朝霧山手町自治会で住民座談会を開催、地域課題の聞き取りを行った。	・地域のキーパーソンの考え方や組織体制によりセンターの役割の理解に地域差があることがわかった。	・住民同士で課題を共有し、解決に向けた主体的な話し合いが出来るよう支援する。 ・センターで対応が多い地域での見守り体制を構築し、認知症や困りごとが重篤化する前に相談が入る体制をつく	・住民と共に消費者被害予防の啓発活動を行う。 ・広報紙・出前講座での啓発活動を継続する。	継続	住民の理解にあわせ講座を行い、地域全体で被害にあわない取り組みにつながっていくよう取り組んでいただきたい。 今後、個別ケースの対応が多い地区を重点にセンターの役割の周知を勧めていっていただきたい。

朝霧中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成出来たか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
松が丘第2住宅自治会	「ご近助力」を高めよう	・自治会のキーパーソンと話し合い、既存の集いの場を活用した出前講座を開催、新旧住民が交流することが出来た。		・4月、出前講座の希望を取り、希望の多かったテーマで開催、6月、健康測定会を実施した。10月は人生会議、2月は詐欺被害の講座を実施。 ・センターと住民の顔が見える関係が出来、集いの場のキーパーソンや民生委員・児童委員から気になる人の相談が入るようになった。	・サロンの参加者同士で見守りや声かけ等、つながりがあることがわかった。 ・既存の集いの場は、高齢者が対象で参加住民が固定していたが、7月に新たなサロンを自治会が立ち上げた。出入り自由で年代関係なく参加出来る。誰でも参加出来る取り組みを自治会が始めていることがわかった。	・若い世代が主体的に地域活動や高齢者の見守り活動に関わることができる。 ・元気な高齢者は集いの場を楽しみに参加し、参加していない高齢者も含め、住民同士で支え合うことができる。	・松が丘第2住宅での実践をモデルに、今後はつながりの弱い地域の支援を行っていく。	終結	地域住民の理解にあわせて、講座の内容を代えたり、工夫されていました。松が丘第2住宅の支援は終結しますが、個別相談を通じて地域課題の把握を行い、今後もつながりの弱い地域の支援をお願いします。

大蔵中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
大蔵中学校区	認知症を地域で支えるプロジェクト	住民の認知症理解を深めるため、小地域でオレンジサポーター養成講座や認知症学習会の開催を働きかけた。	認知症	自治会や大蔵コミセンにてオレンジサポーター養成講座・認知症学習会を開催した。	住民の認知症予防への関心は高いが、認知症の方をサポートすることは、心理的な負担が大きいことがわかった。	住民に認知症の理解が広まり、認知症になっても、地域の見守りやサポートで、その人らしく住み慣れた地域で暮らし続けることができる。	キャラバンメイト・シルバーサポーターと共に、オレンジサポーター養成講座、認知症の理解を住民に啓発する活動を継続する。	継続	これまで関わりのなかった自治会や団体へアプローチを行い、認知症理解の啓発活動の継続をお願いします。
		地域で認知症当事者や家族の思いを発信できる人材を発掘、住民に対して認知症について当事者の思い、理解を深めてもらうことを目指した。 シルバーサポーターやキャラバンメイトによるオレンジサポーター養成講座・認知症啓発等の主体的な活動への移行を目指す。	生活支援体制整備	認知症当事者への参加をアプローチしたが参加に至らなかった。	認知症当事者自身が学習会等への参加することに対しての心理的負担が大きかった。	認知症や高齢者の困りごとを自分事として考え、助け合える地域となる。	認知症理解促進のため、勉強会を継続、認知症当事者の協力を得て認知症啓発活動を行う。		
大蔵中学校区	地域と専門職をつなぐプロジェクト	おおくらまちなかゾーン会議で生活課題抽出アンケートを実施し、生活課題や地域での助け合い活動を把握した。	生活支援体制整備	大蔵地区の65歳以上、145名を対象に生活課題抽出アンケートを実施、アンケート結果をもとに取組や啓発活動の検討につながった。	生活課題抽出アンケートでは、アンケート結果と住民が考えた地域の課題に相違があった。介護保険サービス以外の部分での困り事が出てきていることが分かった。	・生活課題抽出アンケート結果をもとに住民、おおくらまちなかゾーン会議の場で地域にとってメリットのある取組、働きかけを行うことができる。	おおくらまちなかゾーン会議にて地域にとってメリットのある取組・働きかけを協議、実施する。	継続	生活課題抽出アンケートの結果、おおくらまちなかゾーン会議での取り組み、目に見える形での取り組みにつながるよう検討していってください。
		地域の団体と連携し、地域の商店等を一緒に訪問し、地域住民の助け合いや困りごとを把握した。		中崎小学校地区社協がデイサービス・デイケア（介護保険）の訪問を行い、中崎小学校地区社会福祉協議会が福祉施設の避難訓練に参加、連携につながった。	地区社協自身でデイサービス等事業所につながりをつくるようになった。	地区社協が障害福祉サービス事業所とつながりができるようになる。			

大蔵中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

大蔵中学校区	みんなで見守りプロジェクト	居宅介護支援事業所、介護保険サービス事業所の巡回訪問、各事業所で聞き取り、交流会での研修に生かしていく。		民生委員・児童委員と居宅介護支援事業所の交流会を朝霧・大蔵地区にて各1回実施。民生委員・児童委員と介護支援専門員の連携を密にする為、双方の連絡先情報シートを作成、情報共有を行った。	民生委員・児童委員、居宅介護支援事業所との連絡先情報シートの運用について、どのような課題があるか検証が必要である。	民生委員・児童委員と介護支援専門員が直接連絡を取り合うことができると共に、認知症の当事者の早期発見や困りごとの解決につながる。	民生委員とケアマネとの定期的な交流会・勉強会を実施する。	継続	連絡先情報シートについて、一度きりの作成ではなく、活用方法をお互いに共有の上、よりよい活用方法を検討してください。
		民生児童委員と居宅介護支援事業所との交流会を開催、民生児童委員と専門職が理解を共通にすることで、地域の困りごとを早期発見を目指す。		民生委員・児童委員、介護支援専門員との交流会で虐待防止研修を開催、大蔵コミセンでは明石警察署と連携し消費者被害、特殊詐欺の啓発を実施、市民や専門職の関心は高く質問も多く聞かれた。	参加者の消費者被害、特殊詐欺の意識が高く、自分の事としてとらえている。参加人数を増やしていき、消費者被害、特殊詐欺の予防に努めていく。	住民、専門職が虐待に対する知識をもつだけでなく、虐待を未然に防ぐ為に日頃からつながる。 消費者被害等について、住民の意識を高める為、講座・啓発活動を行い、被害を未然に防止する。	虐待防止や消費者被害の啓発活動を警察署、消費者センターとの連携、啓発活動の機会を増やす。	拡充	消費者被害、特殊詐欺について、講座等の参加者以外にも広報・啓発が必要です。他人事ではなく私事としてとらえられるよう、今後も広報・啓発、必要に応じて出前講座等の開催や広報をお願いします。

錦城中学校区
 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
錦城校区全体	何 認 か 知 で 症 き に な つ い い 会 て	まちなかゾーン会議で抽出された地域課題の一つである「将来介護を担う働く世代の認知症理解を深める」ため、働く世代が参加しやすい休日に「認知症について何かできないかい」を開催した。	認知症 生活支援体	11月16日（土）午前中にウィズあかしで開催し、20人の地域住民やキャラバンメイトや専門職の参加があった。	○自治会回覧や掲示板等を通じて広報した結果、予防等について学びたい高齢者の参加が多かった。 ○将来介護を担う働く世代の参加者は少なかったが、センターが呼びかけをした関係機関の専門職の積極的な参加があった。また、住民として参加された専門職がいた。 ○参加者それぞれが持つ知識や経験等の情報交換を通じて、「学びにつながった」といった感想が多く、それぞれの参加目的に応じて各々が何かできないかを考えたり感じたりする機会となった。	認知症について様々な世代と興味がある方が気軽に参加できる。	個人や団体に参加の働きかけをする。	継続	認知症やその家族を支援したいという方、認知症に関して知識を増やしたいという方、家族がまさに認知症で情報を得たいという方、情報を発信したいという方など参加の動機は人それぞれでしたが、「介護の話を聴いて心を打たれた」「いい情報が得られた」など参加者同士が対話を通してつながりが持っていました。
錦城校区全体	繋 支 が 援 り 者 プ 同 ロ 士 ジ の ェ ク ト	民生委員・児童委員と介護支援専門員の交流会を実施した。	包括的継続	10月8日（火）にウィズあかしで開催し、「個人情報保護法の取扱いの基本ルール」をテーマに、民生委児童委員、ケアマネジャーが講義を受けた。参加者は、民生委員・児童委員10人、ケアマネジャー14人だった。	○所属法人の方針で担当する要介護（支援）者の情報を民生委員・児童委員等と共有しない事業所があることが確認された。また、その方針を民生委員・児童委員と共有するケアマネジャーがいることが明らかとなった。 ○委嘱後間がない民生委員・児童委員は、ケアマネジャーとの連携の機会がなく、また相談等がないと独居高齢者等に関わるきっかけがない実情だとの意見があった。	民生委員・児童委員とケアマネジャーとの連携がすすむ。	継続的な意見交換会、交流会を行う。今年度、民生委員・児童委員とケアマネジャーの交流会にて個人情報について学びを深めたが、その学びを活かした好事例を発表し、お互いの役割の理解を深める	継続	民生委員・児童委員とケアマネジャーの連携には、個人情報保護法の壁だけでなく、連携の基本である相手への配慮の有無が影響していることが分かった。利用者一人一人の地域自立生活の支援の充実に向け、本取り組みは特に丁寧に行い、継続が必須と考えます。
センター全域	つ な が り の 輪 を 広 げ よ う プ ロ ジ ェ ク ト	・キャラバンメイトミーティングを年2回開催し、キャラバンメイトと共にオレンジサポーター養成講座の企画を考えた。 6月：オレンジサポーター養成講座の開催先として、兵庫ヤクルトの提案がある。 12月：実施したオレンジサポーター養成講座の振り返りと意見交換を行った。	認知症	・オレンジサポーター養成講座を6回実施した。 ①10/1 兵庫ヤクルト時のまちステーション ②10/17 林コミセンのサロン ③11/13 日新信用金庫 ④2/20 損保ジャパン ⑤2/26 錦城地区いきいき教室 ⑥2/27 損保ジャパン ・①についてはキャラバンメイトミーティングにてオレンジサポーター養成講座を受けてほしいと意見があったためアプローチした結果、兵庫ヤクルトからも受講希望があった。また、開催前に行った事前アンケートの回収率が100%という結果が高評価された。	・キャラバンメイトが「認知症について知ってほしい」と考えるアプローチ先として、企業や学校、住民など多岐にわたることがわかった。 ・キャラバンメイトミーティングの参加者は10名程で固定の方が来られ、メイト同士の繋がり場にもなった。 ・兵庫ヤクルトは既にオレンジサポーター養成講座を受講済みであったが、事前アンケートを通して「当事者への対応方法が知りたい」「家族がどこへ相談したらよいか知りたい」といった2回目開催のニーズが確認できた。 ・キャラバンメイトの学習意欲が高いことが確認できた。 ・キャラバンメイトミーティングの参加者のうち、センター圏域に居住・勤務するキャラバンメイトは数人のみであることが確認できた。	・センター圏域に居住・勤務するキャラバンメイトが増える。 ・オレンジサポーター養成講座について、キャラバンメイトと一緒に企業等にアプローチし開催できる。	・センター圏域に居住・勤務するキャラバンメイト候補者に、キャラバンメイト養成研修について案内し、参加につなげる。 ・キャラバンメイト同士の情報交換や情報提供の場として、キャラバンメイトミーティングを年2回開催する。 ・企業や介護・医療関係機関等へオレンジサポーター養成講座開催のアプローチをする。	継続	センター圏域外に居住または勤務するキャラバンメイトと共に活動する現状が続いている。オレンジサポーター養成講座の依頼は企業からが多く、商業地区ならではの特徴が明らかとなった。地域住民は認知症予防に関する意識が高く、見守りの目を更に増やす土壌づくりは始まったばかり。地域特性を生かし、企業等へのオレンジサポーター養成講座をキャラバンメイトと共に進めていきたい。

衣川中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト 名、課題No.	やったこと、実績 、計画した課題①	当てはま る事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にその先の先に最終的にこ うなってほしい（展望、最終 目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
王子小学校区	お互い様という声があふれる地域づくり	①個人向けオレンジサポーター養成講座を実施する。 ②民生委員・児童委員と介護支援専門員との交流会を実施する。	認知症 生活支援体制整備 包括的継続的	①オレンジサポーター養成講座の実施について以下の団体等に働きかけを行った。 ・認知症カフェに参加する連合自治会 ・まちづくり協議会 ・校区の民生委員・児童委員 結果、オレンジサポーター養成講座の実施には至らなかったが、次年度の連合自治会内での開催について検討していただくこととなった。 ②7月4日（木）に衣川コミセンで開催、「個人情報保護法の取扱いの基本ルール」をテーマに、民生委児童委員、ケアマネジャーが講義を受けた。参加者は、民生委員・児童委員13人、ケアマネジャー12人だった。参加者アンケート（回答率100％）で、互いに「今後は円滑な連携のために、連絡しようと思う気持ちが高まった」にほぼ全員が「そう思う」「強くそう思う」と回答した。	①連合自治会、まちづくり協議会、民生委員・児童委員いずれもが他の役割を兼務されており協議事項も多く、取り組みの優先度としては高い現状があった。 ②民生委員・児童委員からは「困り事や意見を出すことで役割に対する理解が進んだ。情報の共有が大事だ。」ケアマネジャーからは「民生委員・児童委員さんとお会いする度に話しやすい空気になるので、定期的にこういった場が必要だ。」との声を得られた。また、「独居の方の場合は民生委員との連携を認識しているが、2人以上の高齢者世帯の場合は台帳等もなく連携していない現状だ。連携に向けてルールやマニュアルがあるかないかではないか。」といった意見も得られた。	①どの小学校区においても認知症への理解が住民に広がり、認知症があっても地域活動や趣味に安心して参加できる。生活への困りごと等が出てきた際に住民同士の支援や支援機関との繋がりをもてる。 ②中学校区全域で「高齢者等の地域自立生活」に向けて民生委員・児童委員と介護支援専門員が手を携えられる。	①認知症の方やその家族の支援等の地域課題解決に向けた取り組みの優先度が上がるよう、認知症の方やその家族の生活の実情について住民や団体等と情報共有する。 ②中学校区全域で民生委員・児童委員と介護支援専門員との交流会を継続して実施する。	拡充 拡充	①一年を通して、地域では各種催しが行われており、それらの担い手のほとんどが他の役も兼ねておられ、非常に忙しくされています。新たな取り組みではなく既存の取り組みに寄せていただけるよう、住民への働きかけは丁寧に行えればと思います。 ②お会いする度に話しやすい空気になるとの意見を得、続ける意味が見い出せたと思います。住民の地域自立生活支援において連携は欠かせないので継続していければと思います。
南王子地区	安心感育みプロジェクト	一人暮らし高齢者等の備えとして、すこやかサロンにおいて以下の情報提供を行う。 ・もしものときの備えシート ・終の棲家について考える ・救急れんらくばん ・整形疾患（骨折予防・下肢筋力維持向上）に関する基礎知識 ・認知症（予防・対応）に関する基礎知識　ほか	認知症 権利擁護 一般介護予防	年間テーマを「どうする備え」とし、以下の内容ですこやかサロンを実施した。 「高齢者虐待防止に向けてみんなでできる備え」 「介護保険制度を上手に活用する備え」「避けられない自然災害～今からでも遅くない！モノと人の備え」「40～50代から始める健康管理」「正しい救急要請と、普段からの備え」「家族の変化を早期発見！遠方の家族の介護の備え」「ヒートショックを予防する備え」「終の棲家の備え」「葬儀の備えと人生会議」「好きな物をいつまでもおいしく食べる備え」「骨折を予防し、下肢筋力を維持向上する備え」結果、人生会議を盛り込んだ「葬儀の備えと人生会議」の参加が一番多く、『子どもとの話し合いが必要だと思った』『これから先の人生を大切に生きたいと思った』と感想が得られた。	主催するまちなかゾーン会議において、以下の意見があった。 ・サロンへの参加が難しい障がい者へは、情報がいきわたりにくいのではないかと ・すこやかサロンのテーマ等に興味や関心がない人が、思わず手取るようなチラシをつくるなどの工夫が必要ではないか。 ・参加者の住まいを受付表にて確認した結果、中学校区全体から満遍なく参加されていることが分かった。	高齢者に加え、情報が得にくい障がいのある方にも情報が行き渡る。 今まで参加されなかった人が参加する。	・すこやかサロンで提供された情報を障害事業所等に提供する。 ・すこやかサロンのチラシにパズル等を盛り込み、テーマに興味のない人が手にするような工夫をする。 ・対象地区を開催場所の小学校区にこだわらず、中学校区へと広めることとする。	拡充	ほぼ毎月開催するすこやかサロンの会場である衣川コミセンは、市民講座を定期開催するなど学習の場として住民に定着していますので中学校区全域をターゲットにすることは自然な方向だと思います。また、参加しにくい障害者等へゾーン会議として情報提供することは支え合いの推進という点で非常に大事な視点だと思います。

衣川中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

林地区	プロジェクト 気軽に相談	<p>・まちづくり協議会の理事会、自主グループ活動、各サロン、高年クラブ等へ改訂版センターチラシ等を活用し、センターの役割機能について説明を行う。</p> <p>・サロン参加者が知る住民同士の繋がりや、相談のしやすさ等の地域の実情について改定版センターチラシ等を活用して把握する。 (ヒアリング)</p>	生活支援体制 総合相談	<p>・まちづくり協議会、サロン等にてセンターチラシを配布しセンターの役割を説明した。</p> <p>・集合住宅で行われている自治会活動や高年クラブ活動にてセンターで受けた事例を交えてセンターの役割を説明した。集合住宅内での住民同士の繋がりについて現状を伺う事ができた。</p>	<p>・センターの役割について説明した後、どんな相談を受けてくれるのか今まで分からなかったという声があった。</p> <p>・コロナ以前に比べて活動参加人数が減少し、住民同士の関りが少なくなったので、活動に参加していない人のことは分からないと聞いた。また、センターで把握している消費者被害の事例を用いて啓発を行ったが、「自分は大丈夫」と我が事として捉えていない方がおられた。継続して説明をしてほしいとの依頼もあり、事例を通して引き続き消費者被害防止を含め、センターの役割機能の啓発をしていく必要があると確認できた。</p>	<p>・困りごとを抱える住民が、まちづくり協議会やサロン等を通じて知り合った近隣住民に相談をした際に、総合支援センターを紹介することができるとなる。</p> <p>サロンが住民にとって情報共有や相談できる場となる。</p>	<p>・引き続きセンターチラシを用いて役割を説明する。</p> <p>・その際、センターに寄せられる相談等から得られた地域の実情等の情報を用いるなど工夫する。</p>	継続	<p>まちづくり協議会やサロン等でセンターの役割機能等の説明を行いました。また、集合住宅ではコロナ以前の参加人数に戻らない現状が明らかになり。とくに消費者被害に関しては自分ごととして捉えられない住民がおられました。役員等の入れ替わりもあるため、引き続きセンターの役割機能等について周知啓発を行います。</p>
センター全域	つながりの輪を広げようプロジェクト	<p>・キャラバンメイトミーティングを年2回開催し、キャラバンメイトと共にオレンジサポーター養成講座の企画を考えた。</p> <p>6月：オレンジサポーター養成講座の開催先として、兵庫ヤクルトの提案がある。</p> <p>12月：実施したオレンジサポーター養成講座の振り返りと意見交換を行った。</p>	認知症	<p>・オレンジサポーター養成講座を6回実施した。</p> <p>①10/1 兵庫ヤクルト時のまちステーション</p> <p>②10/17 林コミセンのサロン</p> <p>③11/13 日新信用金庫</p> <p>④2/20 損保ジャパン</p> <p>⑤2/26 錦城地区いきいき教室</p> <p>⑥2/27 損保ジャパン</p> <p>・①についてはキャラバンメイトミーティングにてオレンジサポーター養成講座を受けてほしいと意見があったためアプローチした結果、兵庫ヤクルトからも受講希望があり、ヤクルトレディの再受講につながった。また、開催前に行った事前アンケートの回収率が100%という結果が高評価された。</p>	<p>・キャラバンメイトが「認知症について知ってほしい」と考えるアプローチ先として、企業や学校、住民など多岐にわたることがわかった。</p> <p>・キャラバンメイトミーティングの参加者は10名程で固定の方が来られ、メイト同士の繋がり場にもなった。</p> <p>・兵庫ヤクルトは既にオレンジサポーター養成講座を受講済みであったが、事前アンケートを通して「当事者への対応方法が知りたい」「家族がどこへ相談したらよいか知りたい」といった2回目開催のニーズが確認できた。</p> <p>・キャラバンメイトの学習意欲が高いことが確認できた。</p> <p>・キャラバンメイトミーティングの参加者のうち、センター圏域に居住・勤務するキャラバンメイトは数人のみであることが確認できた。</p>	<p>・センター圏域に居住・勤務するキャラバンメイトが増える。</p> <p>・オレンジサポーター養成講座について、キャラバンメイトと一緒に企業等にアプローチし開催できる。</p>	<p>・センター圏域に居住・勤務するキャラバンメイト候補者に、キャラバンメイト養成研修について案内し、参加につなげる。</p> <p>・キャラバンメイト同士の情報交換や情報提供の場として、キャラバンメイトミーティングを年2回開催する。</p> <p>・企業や介護・医療関係機関等へオレンジサポーター養成講座開催のアプローチをする。</p>	継続	<p>・センター圏域外に居住または勤務するキャラバンメイトと共に活動している現状が続いている。</p> <p>・企業からのオレンジサポーター養成講座の依頼が多く、商業地区ならではの特徴が明らかとなった。</p> <p>・<u>地域住民は認知症予防に関する意識が高く、見守りの目を今以上に増やす土壌づくりは始まったばかり。</u></p> <p>・地域特性を生かし、企業等へのオレンジサポーター養成講座をキャラバンメイトと共に進めていきたい。</p>

野々池中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
	get ready for のの	<p>・専門職や介護経験者・キャラバンメイトが主体となり、地域で正しい介護についての講座を開催した。</p> <p>・若い世代を含めた地域住民がや介護支援専門員等の専門職が、一緒になって人生会議、認知症、正しい介護に触れる機会を作った。</p>	<p>医療介護連携</p> <p>権利擁護</p> <p>包括的継続的</p> <p>生活支援体制整備</p>	<p>・サロンや健康教室にて介護に関する講話を7回実施。 講師として専門職と協働した。 参加者は家族に介護が必要な人が多く、これから必要な人の参加は少なかった。</p> <p>・ゾーン会議で人生会議をテーマにあげることで、定例会議や耳より講座でもしばなカードを用いて参加者が人生会議を実践できる機会を作り、人生会議についての理解を深めることができた。</p> <p>・鳥羽小学校でオレンジサポーター養成講座を開催した。野々池中学校にオレンジサポーター養成講座の開催を打診した。</p> <p>・鳥羽小学校で9月、12月に福祉用具体験会を実施し、福祉用具サービス事業所と協働し、小学生が介護について触れる機会を作れた。</p>	<p>・まだ必要ではない介護についてのイメージがしにくい。</p> <p>・人生会議というテーマが漠然としており、機会が無ければ誰もが身近な問題として捉えにくい。</p> <p>・小中学生のうちから高齢者、認知症に対して理解が進むような働きかけが必要であり、保護者（現役世代）についても福祉や人生会議について知る機会を増やす必要がある。</p>	<p>・地域住民が介護についての正しい情報を知る専門機関と連携を取りながら、認知症高齢者も地域住民も自分らしく生活ができる。</p> <p>・専門職と地域住民が一緒になって人生会議の実施に取り組む。</p> <p>・小中学生およびその保護者世代に対し認知症理解が進み相談に繋がりがしやすい地域になる。</p>	<p>今後も介護や認知症についての啓蒙を続けていく。</p> <p>・小学校、中学校に繋がりを持つことができたため、引き続き時間をかけて取り組みを続けていく必要がある。</p> <p>・まちなかゾーン会議にて引き続き、年単位で地域住民に人生会議が浸透するように、専門職、地域活動者とともに取り組みを継続する。</p>	<p>継続</p> <p>継続</p>	<p>認知症や介護が必要な方でも住みやすい地域づくりを目指し、認知症や人生会議などのテーマについて、幅広い世代、特に小中学校に向けた啓蒙活動に取り組んでくれました。また地域住民と専門職の繋がりができるように、協働できる機会や交流できる場を設けるなどの工夫も行いました。これらの取り組みが、誰もが自分らしく住める地域につながっていけばと感じています。</p> <p>また相談件数が多く、地域の居場所が少ない鳥羽地区の地区診断に取り組んでおり、その他の地区も含め、早期相談、問題解決できるように、地域総合支援センターについて知ってもらえるような取り組みを継続してもらえればと思います。</p>
		<p>・鳥羽地区で活動者が不在となり、居場所が減っているという現状がある。また個別事例、総合相談より鳥羽地区の傾向を毎月の評価会議で把握した。</p>		<p>個別事例から鳥羽地区に独居で、様々な問題を抱えている人の相談が多く、問題が深刻になってから相談に至る事例が多い。</p>	<p>問題を抱える当事者が、早期に相談ができない。孤立しているため、周囲も本人の状況を把握しにくい。</p>	<p>・地域総合支援センターが困りごとの相談窓口であることを知り、誰もが安心して生活ができる。</p> <p>・地域総合支援センターと地域住民とで地域課題に対する取り組みが検討できる。</p>	<p>・鳥羽地区の住民に対しアンケートを実施し地域の課題整理を行い、地域住民と取り組みを検討する場を設ける。</p> <p>・地域活動者、専門機関とも協働し、既存のサテライト、健康測定会の開催方法を検討していく。</p> <p>・「生活の困りごとについての相談は、地域総合支援センターへ」という認識を地域住民に周知する。</p> <p>・事例が深刻化しないよう、早期相談に繋がる。</p>	<p>継続</p>	

望海中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にその先に最終的にこうなしてほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
望海	結んでつないで	貴崎校区でみんなのひろばを展開し、地域住民と地域課題について考える機会を持った。個別事例からでた8050問題を考える取り組みを試みた。	総合相談 包括的継続的 生活支援体制整備 権利擁護	みんなの広場を11月23日に開催した。11回の座談会で、住民と課題について話し合い、8050問題についての個別相談が多いと情報提供した。	8050問題について個別相談が多いことを共有したが、住民が感じる地域課題は少子化・空き家問題に関する課題への関心が高かった。	継続的に地域課題を検討する場がある。	地域課題を検討する場としてのゾーン会議のありかたをメンバーと考える	継続	まちなかゾーン会議の取り組みである「みんなの広場」で地域課題を住民と検討し、劇で表現しました。その過程で地域総合支援センターと住民が感じる地域課題に違いがある事が分かり、個別事例だけでなく、住民の声を含めた、広い視野から地域課題を検討することの大切さを感じました。また多くの住民に地域総合支援センターの役割が伝わるように、カレンダーや広報紙を利用した啓蒙活動を継続することで、早期相談に繋がり、個別事例の重症化を防ぐことができればと思います。
		・カレンダーを地域の企業や商店にも配布した。		カレンダーを11月に作成し12月中に374枚配布。カレンダー配布により顔と顔をあわせ、相談しやすい関係づくり・地域総合支援センターの役割周知を行った。	カレンダーに地域総合支援センターの連絡先が記載されていることで、相談先が分かりやすいとの声があった。また銀行等にも地域総合支援センターの連絡先が分かり、相談しやすくなった。	福祉に関する困りごとなどあったときに相談先が分かる。	福祉の相談先としての周知を継続する。	継続	
		・広報紙で地域総合センター業務の周知を強化した。		7月の広報誌に地域総合支援センターの役割を詳しく掲載、広報誌を自治会等地域住民に配布しセンターの役割を知っていただく機会となった。1月にも広報誌を配布し権利擁護について紹介を行った。	地域総合支援センターの役割を知る機会となるように、役割について詳しく掲載したが、広報誌はA4片面サイズのため掲載スペースが小さく、情報を確認しにくかった。	住民が地域総合支援センターの役割や地域活動について知ることができる。	広報誌のサイズや伝える内容など検討し内容の充実を図る。	継続	

望海中学校校区 地域支援報告書（事業報告書）

		<p>・人生会議の内容を形に残し、家族や支援者と共有することについて、研修・交流会等で啓発した。</p>	<p>医療介護連携</p> <p>認知症</p> <p>包括的継続的</p>	<p>・12月と2月でまちなかゾーン会議主催のまちかど健康教室4か所で人生会議に関する講話を開催し、75名の住民が参加した。</p> <p>・居宅支援事業所への巡回で、もしもの時の備えシートについて紹介した。</p> <p>・地域の講話で人生会議ともしものときの備えシートを紹介した。</p>	<p>【専門職】人生会議は大切な話題だが、話しにくさがあったり、タイミングが難しい。</p> <p>【住民】健康教室や地域の講座等に参加する住民は人生会議について情報を得ることができるが、参加できない住民は人生会議について触れる機会が少ない。</p>	<p>・専門職が人生会議を実践し、住民が人生会議に触れる機会が増える。</p> <p>・住民が自分事として人生会議をとらえることができる。</p>	<p>・住民及び専門職に継続して人生会議の周知を行う。</p>	<p>継続</p>	<p>人生会議や認知症など広く周知するために、専門職にも協力を仰いだり現役世代が参加しやすい工夫をした結果、現役世代の中にも認知症に関心がある住民がいる事が分かりました。また人生会議を広めるために、まずは介護支援専門員等の専門職が利用者に対し人生会議の聞き取りができ、結果もしもの時の備えシート等の紹介や利用促進が進み、住民自身が様々な「備え」が自らできるように、取り組みを続けていきたいと思います。</p>
	<p>予望海護</p>	<p>・現役世代、子供世代にオレンジサポーター養成講座が開催できるように、キャラバンメイトと協力して働きかけた。</p>		<p>・7月に花園小学校で4年生77名と教師2名を対象にオレンジサポーター養成講座を開催した。</p> <p>・土曜日に2回オレンジサポーター養成講座を開催し、現役世代への参加を呼びかけた。</p> <p>・17人のキャラバンメイトに声をかけ、講師等で11人の参加があった。</p>	<p>・オレンジサポーター養成講座の開催により、キャラバンメイトの活躍の場はあったが、キャラバンメイト同士の情報交換の機会なかった。</p> <p>・土曜日の開催は、現役世代の参加率が高く、関心が高いことが分かった。</p>	<p>・若い世代が認知症について学ぶ機会が増える。</p> <p>・住民の認知症について理解が深まり、認知症になっても自分の望む暮らしができるとともに、認知症に優しい地域になる。</p>	<p>・オレンジサポーター養成講座の開催や、認知症に関する情報発信を地域で行う。</p> <p>・認知症の理解が深まり、自分らしく生活できる地域になるよう、キャラバンメイトとの協力体制を整える。</p>	<p>継続</p>	

望海中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

	ニ ナ ゾ ー	・健康教室の講師や調整役にボランティアの協力を募った。	一般介護予防	<ul style="list-style-type: none"> ・ゾーンメンバーと協働し、防災・フレイル・介護保険のテーマで健康教室を3か所で開催した。 ・まちなかゾーン会議で、メンバーと協議し、マッチングできる講師やテーマについて意見集約できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まちなかゾーン会議のメンバーになっている専門職の活躍の場が少なかった。 ・住民は役割が重複している方も多く、調整役を担うのは難しい。 ・講師やテーマの調整について、得たい情報とすり合わせる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域で活躍できる人が増えて、居場所や活躍の場が増える ・住民が地域の資源情報をわかり、それを生活に活用できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・健康教室のニーズを把握する。 ・地域の専門職と住民をつなぐ。 	その他	新たな担い手の発掘のために、健康教室の開催においてまちなかゾーン会議のメンバーと協働できました。若い世代の担い手も発掘するために、2次元コードの活用等も検討しましたが、住民が必要としている情報の把握や、ホームページの調整は1中学校区のみでは取り組みず実現には至りませんでした。今後も広報紙の発行等を通じて地域総合支援センターの活動の発信は継続していけたらと思います。
		・2次元コードをチラシや広報誌、カレンダーに用い、住民に対し明石市社会福祉協議会や地域総合支援センターの周知を図った。	生活支援体制整備	<ul style="list-style-type: none"> ・カレンダーや冬の広報誌を用いてセンターの役割等を情報提供した。 ・2次元コードの活用を検討したが、連動させる情報を精査できず未実施となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字による情報の多い広報誌では、情報が伝わりづらい。 ・コードを読み取った先の情報が住民へ伝わりやすいように整理されていない。そのため2次元コードの活用に至らず、1つのセンターのみでは対応できないことが分かった。 	住民がほしい情報が得られる。	ホームページやSNSを用いた情報提供を求める声があるが、望海地区のみで判断・継続することは難しい。次年度改めて広報について検討していく。	中止	

江井島中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
江井島全域	住み慣れた地域で暮らし続けよう	<p>・小学校区南部の自治会等に働きかけ、認知症勉強会、SOS声かけ訓練を実施する。</p> <p>・人権教育推進員と連携し、自治会等に向けて、オレンジサポーター養成講座の開催を促す。</p>	<p>医療介護権利擁護 包括的継続的 一般介護予防 認知症 地域ケア会議 生活支援 体制整備 総合相談</p>	<p>認知症勉強会とSOS声かけ訓練を実施することで、西江井自治会の住民に向けて認知症の理解と正しい対応の仕方を周知することができた。</p> <p>訓練後に実施したアンケートの結果、前年度より「お住まいの地域の中で認知症などになる人がいる」と回答した方が2倍に増えており、必要な方への見守り意識の向上に繋がった。</p> <p>勉強会等に参加した方が地域の様々な活動の担い手として参加する機会の創出に繋がった。</p> <p>人権教育推進員と連携し、東江井高年クラブで2月に勉強会を行った。当初はオレンジサポーター養成講座行う予定だったが、地域住民と打ち合わせの結果、11名の参加者にアドバンス・ケア・プランニング（ACP）について伝えることが出来た。</p>	<p>今後もSOS声かけ訓練を行った方がいかにというアンケートの質問に対し、約9割の方の賛同が得られた。</p> <p>認知症高齢者役を地域住民が担う際、顔見知り同士で訓練をする場合はやりにくさがあった等の意見があり組み合わせの配慮が必要である事がわかった。</p> <p>また、より多くの方に認知症の理解を普及する為には、地域資源である福祉事業所や民間企業の協力も不可欠であることがわかった。</p> <p>参加者の多くは、自身の認知症予防や家族が認知症になった場合の対応の仕方を知りたいという理由で参加された。支援が必要な方へ声掛けや見守り等の必要性を知ってもらうためには継続した認知症理解の啓発が必要であると感じた。</p>	<p>・認知症の理解や正しい対応の仕方が周知され、必要な方への見守りが行えることにより、認知症になっても住みなれた地域で生活できる。</p> <p>・オレンジサポーターやシルバーサポーター等の養成講座の受講者が増加し、サロンで認知症の方への対応ができるサポーターが増え、地域の様々な活動の担い手として参加する。</p>	<p>認知症勉強会、SOS声掛け訓練を実施する。</p> <p>より多くの方に認知症の理解が普及できるよう、今年度聞き取りを行った福祉事業所や企業等にも参加を促す。</p>	継続	<p>認知症勉強会とSOS声かけ訓練が両輪として行われることで、参加者の認知症の理解や正しい対応の仕方が周知されました。また訓練終了後参加者のかたが「これからできること」をテーマとして話し合うことで、参加者の新たな行動変容につながったと考えます。次年度は福祉事業所や企業も参加を促し、地域全体の認知症のかたに対する見守りの目が増え、認知症になっても住み慣れた江井島で暮らせる方が増えるよう継続した働きかけをお願いします。</p>

江井島中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
江井島全域	みんなであつこう支援のわ	<p>・令和5年度、江井ヶ島総合市場で実施していた出前講座を、地区社会福祉協議会等が実施するフレイル予防研修会時やサロン、高年クラブ、自治会等の団体へ対して行っていく。</p> <p>・民間企業とは対応の困難な事例、サービス事業所とは地域課題の共有を図り、必要な連携の在り方を検討する。</p>	<p>総合相談 医療介護連携 権利擁護 包括的継続的 一般介護予防 認知症 地域ケア会議 生活支援 体制整備</p>	<p>令和6年度に介護保険やアドバンス・ケア・プランニング（ACP）などについて計7回の講話を開催し、合計102名が参加した。</p> <p>12月から2月にかけて、民間企業14か所、サービス事業所6か所を訪問し聞き取り調査を行うことで、困りごとの相談先がセンターであると伝えた。</p>	<p>介護保険や人生会議等講義の参加者から「介護保険を利用する場合、どういう状態になったら相談したらいいのかわからない。」という声が多く上がったことから、事例をもとに説明する必要性を感じた。</p> <p>聴き取り調査を行った民間企業からおおくば総合支援センターへの相談はなかった。</p> <p>調査したうちの80%以上の福祉事業所は地域貢献に関心があるが行っていない。</p>	民間企業、福祉サービス事業所から福祉に関する相談がセンターに入るようになり、早期発見・早期対応ができるようになる。	<p>昨年度の民間企業14か所、福祉サービス事業所6か所に対しておこなった聞き取り調査の結果を集約して分析する。</p> <p>分析した結果をもとに、民間企業、福祉サービス事業所へ結果をお返りする。</p>	継続	民間企業にとっての困りごとをしっかりと捉えることで、地域住民の課題が明確になります。更に民間企業と連携を図ることで、課題への早期対応が可能になります。民間企業に対しては、福祉の考えの押し付けにならないようにわかりやすい説明を心がけてください。

大久保中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなっ てほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
藤が丘地区	気軽に相談プロジェクト	現在関わっている地域活動や地域資源、フォーマルサービスとの連携を密に行い、地域の情報を収集する。また、センター主催の行事を通して、センターが公的な相談窓口であるとの周知を地域住民に広く行っていく	生活支援体制整備 総合相談 権利擁護 医療介護連携 包括的継続的 一般介護予防	・7月に民生児童委員協議会にて藤が丘地区での民生委員・児童委員との連携事例について紹介を行った。 ・9月に藤が丘地区の見守りに関する会議へ参加し、地域の課題についての聞き取りと、センターの役割について周知・啓発を行った。 ・12月に藤が丘地区にある地域活動(藤江カフェ・オアシス・藤が丘公民館)へ身近な相談窓口として周知するためにカレンダーの配布を行った。 ・2月に藤が丘公民館で行われているサークルフェスタに参加。健康増進に向けたそれぞれの活動への取り組みについて聞き取りを行った。 ・2月にまちなかゾーン健康教室の取り組みとして住民へフレイル予防講座を行い、52人の参加があった。普段からの健康意識の高さがうかがえた。 ・民生委員・児童委員からの相談が昨年5件から今年度10件に増加した。	・地域の高齢化率が高いこともあり、要介護状態になった場合や、一人暮らしになった場合の不安について、地域として関心が高い。 ・フレイル予防講座では住民同士の誘い合いや口コミ等を通じてたくさんの参加者があり、普段の活動を通した住民同士のつながりや健康意識の高さがあると感じた。	認知症や要介護状態になったとしても、地域で声をかけ、支え合いながら、本人が望む社会参加をし続けることが出来る。 現在の活動が地域で継続してあることにより、外出の場やつながりができる場が身近にあり健康維持増進の活動が継続していく。	民生委員・児童委員からの相談件数の増加、健康維持増進の活動を通して住民同士のつながりが確認できたため、このプロジェクトについては終結とする。	終結	地域活動や地域資源、フォーマルサービスとの連携を丁寧に行っていくことで、相談件数の増加につながりました。また普段の活動を通した住民同士のつながりや健康への意識の高さが確認できました。
大久保南地区	地域のつながりプロジェクト	・自治会、まちづくり協議会などに認知症の正しい理解を広める活動をする。 商業施設や金融機関、医院などが多い地域のため、それぞれの機関と連携が取れるような関係作りを継続的に進める。 ・まちなかゾーン会議での検討を通して、地域の団体等と防災について一緒に検討できる関係性の構築、及び小地域で多世代交流やつながりづくりを目的とした取組を行う。 若い世代を含めた地域住民全体に認知症の理解を深める。	生活支援体制整備 地域ケア会議 総合相談 権利擁護 医療介護連携 包括的継続的 認知症 一般介護予防	・オレンジサポーター養成講座を実施（6月に大久保小学校、9月に看護学校）看護学生向けに継続してオレンジサポーター養成講座を開催。受講した学生の中には、オレンジリングを鞆に付け通学している様子も見られるようになっている。 ・大久保南地区内の大型商業施設に働きかけ、9月の認知症啓発月間に合わせ、相談会を実施した。 ・9月に新規開設した医療機関へ訪問し、認知症事業の啓発を実施した。 ・10月に郵便局・ローソンに訪問を行い、企業向けオレサポの開催に向けた案内を行った。 ・2月にまちなかゾーン大久保南地区の取り組みとして、まち協防災訓練にて、地域住民に向け災害時の備えや必要に応じた避難品等のパネル展示を行った。また、子ども・女性・高齢者それぞれに備えた必要品のリストを作成し、配布を行った。防災訓練に子どもから高齢の方まで様々な世代の方の108名参加があり、幅広い世代に向けた周知と、交流の場につながった。	・9月が認知症の啓発月間になっている事や、市域で取り組んでいる認知症施策について、企業への働きかけは継続が必要。 ・企業内でも認知症の方が買物の途中で家族とはぐれ、スタッフが館内放送で対応したり、探す支援を行っている事について、話を聞くことが出来た。安心して地域で買物などが行えるよう、オレンジサポーター協力事業所を増やす必要がある。 ・社会資源等の情報について住民の関心の高さが見受けられた。	認知症の方が地域の中で自然に見守れながら、安心して買い物などが出来る地域になる。	商業施設や金融機関、医院などそれぞれの機関との関係作りは継続しながら、次年度は認知症に関わる警察からの相談が多い地域にむけ、認知症の正しい理解を広めていく。	終結	大型商業施設へ働きかける中で商業施設内でも検討され、各店舗でのオレンジのディスプレイを基調に認知症啓発チラシを設置するなど、これまでとは違った手法で多くのかたに啓発することができました。

高丘中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなってほしい（展望、	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
高丘西小学校区	たのしくかつどうにっこりしようプロジェクト	・第2回山手台・緑が丘地域ネットワーク会議を開催する。	生活支援体制整備	・「5年後の山手台・緑が丘にとって住みやすい街づくりを考える会（つながる街づくりの会）」を、第2回（8月）に加え、住民の要望から第3回（2月）も開催できた。第3回は企画段階から住民の有志を募り、この会のねらいは「多様な情報、知恵、想いの共有」だという共通認識を持って、有志と協働で運営できた。自治会がない山手台4丁目の住民など新たな参加者も増えた。	・「つながる街づくりの会」はセンターが中心となって運営してきたが、今後は住民主体の運営に移行していくことが必要。	・山手台と緑が丘の住民が主体的に「つながる街づくりの会」を運営できるようになる。そして住民同士が情報や知恵、想いを共有し、この会でのつながりから新たな地域活動に発展する。	・「つながる街づくりの会」について、司会などの役割を住民に担ってもらい、運営支援としてサロンや高年クラブ等の交流会といった小さなつながりを増やす。	終結	山手台・緑が丘地区は、日常生活圏域が同じでありながら、中学校区が違うことで、互いの関わりが少ない地区でした。両地区の有志の参加者により「多様な情報、知恵、想いの共有」の場が創られています。また共有によってサロンや高年クラブ等の交流会開催の希望が両地区ともあることがわかりました。今後も新たな地域活動の発展に向け地域支援課に引き継ぎました。
		・高丘西校区まちづくり協議会と協働した地域づくりを行う。	生活支援体制整備	・高丘西校区まちづくり協議会では、役員の世代交代もあり大変な状況もあったが、「おさんぽマーチ」の活動を通したつながりから「三世代交流会」という既存の地域交流行事に新たな試み（囲碁ボールやポッチャ）を取り入れてもらうことで、協働した地域づくりができた。また、新規の取り組みとして「七夕まつり」が開催され、若い世代の住民も有志で運営に参加していた。センターも企画から関わり、住民組織との協働により、地域で多世代がつながる機会を創出できた。	・高丘西校区まちづくり協議会では、役員の世代交代や新しい実践など、試行錯誤の状況だった。これらの改革がよりよい地域づくりに結びつくよう、今後も協力が必要。	・地域の小さなつながりから高丘西校区全体での多世代交流へと広がっていく。		終結	今後も新たな地域活動の発展に向け地域支援課に引き継ぎました。
		・地域のキーパーソンと協働してまちなかゾーン会議主催の小地域活動を継続する。	地域ケア会議	・「おさんぽマーチ」を高丘西小学校コミセンや山手台県営住宅集会所など3か所で計4回開催し、フレイル予防をさらに広めることができた。山手台では、令和5年度に引き続き県営住宅の集会所を活用したことで、普段あまり接点のない県営住宅と周辺の戸建ての住民の交流につながった。	・まちなかゾーン会議主催で小地域活動を実施してきたが、令和6年度に高丘地区でフレイルサポーターが養成されたので、今後は高丘西小学校区のフレイルサポーターが小地域活動を主体的に実施できるよう、後方支援していくことが必要。	・地域での小さなつながりから多世代交流や助け合いのネットワークへと広がっていく。	・地域のキーパーソンやフレイルサポーターと協働して、まちなかゾーン会議主催の小地域活動「おさんぽマーチ」を継続開催する。	継続	まちなかゾーン会議で合意形成した活動を今後も継続してください。

高丘中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

高丘中学校区	もしもの時の備え方～ え がおで しゃ きつと ぴん ぴん生 きよう (ACP) ～ プロジェク	・全職種が「もしものときの備えシート」を普及させる。 ・サロンでの講話や地域のイベント、ボランティア交流会等で、人生会議の啓発を行う。 ・まちなかゾーン会議主催の健康教室「みちくさサロン」で、「自分で選ぼう！高齢者施設」というテーマの中で講話を行う。	医療介護 連携 一般介護 予防 権利擁護	・「もしものときの備えシート」を出張相談会の来所者に個別で渡したり、サロン代表者や「高丘中学校区ボランティア交流会」の参加者に配布して普及できた。 ・民生委員・児童委員・協力員の研修会は別のテーマで開催されたため啓発できなかったが、サロンや高年クラブにアプローチしたことで、人生会議の講話を５ヶ所で行えた。講話の内容は「もしものときの備えシート」を活用し、もし自分が今、医療や介護が必要になったらどのように暮らしたいのか、自分事として捉えてもらえるよう工夫したことで、効果的な啓発ができた。	・全職種が普及に努めようと考えていたが、医療職と生活支援コーディネーターによる普及がメインとなった。 ・介護保険サービス利用者が、もしもの時に自分が望む医療や介護について、介護支援専門員としっかり話し合うことができていない。 ・集いの場に来られる住民には啓発できたが、来られない住民には伝えることができない。	・もしもの時の備えや人生会議について、地域のキーパーソンや介護支援専門員の理解が進み、積極的に普及される。 ・集いの場に来られる人にも来られない人にも普及し、住民誰もが人生会議を自分事として考えることができています。	・全職種が「もしものときの備えシート」を普及させる。 ・まちなかゾーン会議主催の健康教室「みちくさサロン」を高丘６・７丁目集会所でも開催し、人生会議も含めた内容の講話を実施する。	拡充	「もしものときの備えシート」というわかりやすいツールを利用することで、住民が自分事としてとらえることができ、効果的な啓発につながっています。もしもの時の備えについて、自分事として考える住民が更に増えるよう拡充した関わりをお願いします。
高丘中学校区	か つきあ る よ りどこ ろ いき いき ば っちり プロジェ クト	・「呆が楽会」の運営支援を継続する。 ・自主グループ活動の立上支援と運営支援を実施する。	認知症 生活支援 体制整備	・「呆が楽会」は役員を中心に多くの住民や専門職を巻き込みながら、認知症カフェの安定した運営ができるようになり、さらに多世代交流の新たな取り組みとして「ニコニコひろっぱ」も始まったので、目標以上の達成ができた。 ・自主グループ「木曜クラブ」として、メンバーが主体的に毎月の内容を決めて楽しく活動できており、認知力の低下が見られるメンバーにもシルバーサポーターを持つメンバーがさりげなくフォローできているので、目標を達成できた。	・「呆が楽会」も「木曜クラブ」も順調に運営できており、住民の主体性の高さや行動力が素晴らしい。		住民主体の活動が継続できるよう必要な支援を行いながら見守っていく。	終結	「呆が楽会」「木曜クラブ」共に住民主体の素晴らしい行動力で順調に運営ができています。本取り組みは終結とし、お困りの時は適時対応していきます。

大久保北中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題№	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
緑が丘		<div>・地域ネットワーク会議を8月と2月に開催。企画運営を参加者と協働で行った。参加者同士がつながり、新しい交流の場の提案がされている。次回の会議は令和7年6月を予定。</div> <div>・自治会役員へ説明を行い、会議の目的を説明し協力を得る事ができた。</div> <div>・会議の運営や地域課題に取り組むための有志のメンバー団体『つながる緑が丘』の結成をサポート。自主的な活動に発展した。</div> <div>・1月に住民説明会を実施し、8名の参加者から地域課題を聞き取り、課題の整理ができた。</div>	総合相談 地域ケア会議 生活支援体制	<div>・会議では多世代交流を望む声が多くあり、山手台地区との合同ラジオ体操やサロン交流会の提案など意見交換が盛んにおこなわれた。参加者同士で連絡先を交換してつながる場にもなり、新たな交流のきっかけが出来ている。</div> <div>・『つながる緑が丘』のメンバーの想いや目標を見える化し、住民説明会を通して広報を行った。子育て世代の参加もあり、自治会や住民の理解が少しずつ広まっている。</div> <div>・住民説明会で得られた意見から地域課題を6つにまとめ、具体的な活動目標ができたことで主体的な活動につながっている。その中の一つとして緑が丘内の危険箇所や、子どもやお年寄りが歩きにくい箇所を住民と一緒に確認する取り組みが3月に実施予定である。</div>	<div>・会議や役員会、住民説明会でのヒアリングにより、「緑が丘を良くしていきたい」との思いを持つ方が多く自主的に動ける方も多いことが分かった。</div> <div>・『つながる緑が丘』が結成された。今後はメンバーのそれぞれの想いをまとめて具体化していく力が必要となっている。</div> <div>・『つながる緑が丘』と自治会役員や住民との調整も今後必要になる。</div> <div>・運転免許返納後の外出に関する不安の声が上がっている。外出支援も今後の課題である。</div>	<div>・多世代参加による地域ネットワーク会議が実現し、緑が丘地区・山手台地区のつながりができる。多世代交流を通して地域が活性化する。</div> <div>・「つながる緑が丘」が住民のために自主的に活動ができる。</div> <div>・住民説明会で抽出した6つの地域課題（防災、防犯、高齢化、自治会、インフラ）について、実行しやすい課題から取り組むことができる。</div>	<div>・住民が主体的に地域ネットワーク会議の運営に参加できるようサポートする。</div> <div>・「つながる緑が丘」の活動を見守りながら、必要な提案や助言を行い、「つながる緑が丘」が目指す街づくりをサポートする。</div>	終結	隣接地域である緑が丘と山手台それぞれの参加者の新たな交流のきっかけが出来ました。両地区から望む声があがった多世代交流を通じた地域の活性化にむけて、地域支援課に引き継ぎました。
大久保ダイヤハイ	交流プロジェクト	<div>・昨年度に前管理組合役員に集い場再開の提案を行い、令和6年度から集会所の住人利用が再開された。</div> <div>・令和6年6月に新役員との意見交換を行い、集い場の再開について前向きな意向を確認でき、自治会からの協力も得られる事となった。</div> <div>・個別対応事例などを通して住人の集い場の再開を望む意見を集めた。</div> <div>・令和7年2月に試験的にお茶会を開催し、継続的な開催を行う事となった。</div>	一般介護予防 生活支援体制	<div>・新役員との意見交換や理事長との継続的なやり取りを通して、集い場再開に向けたセンターの介入についても了承された。</div> <div>・個別対応事例4件、民生委員・児童委員、介護支援専門員から集い場再開のニーズを確認できた。</div> <div>・お茶会を民生委員・児童委員と協力者とともに試験的に開催し、11名が参加した。</div> <div>・今後のお茶会開催について、参加者及び理事長から継続開催の希望があった。令和7年度の新役員への引継ぎを依頼している。</div>	<div>・過去に集会所利用に関して公平性を求める声が上がった事もあり、集い場の再開に向けて自治会も住民も慎重に進めているところである。</div> <div>・お茶会運営の役割分担については、定まっていない。今後、民生委員・児童委員と自治会とで話し合いを行う必要がある。</div> <div>・お茶会運営を通し、マンション内の住民の高齢化、自宅にこもりがちな住民、子どもの登下校のマンション内の見守り等孤立を背景とする問題があることがわかった。</div>	<div>・サロンや体操などの集い場が立ち上がり、住民が介護予防に取り組むことができる。</div> <div>・センターや民生委員・児童委員が、身近な相談先として認知され、連携することができる。</div> <div>・住人同士で顔見知りの関係が増え、高齢者や子どもの見守りができる。</div>	<div>・お茶会の中で、健康教室や講座などを開催し、センターの周知や介護保険についての説明を行う。</div>	継続	身近な介護予防の集い場となるように、継続支援をお願いします。
大久保南団地・大窪南・北市住	生活見守りプロジェクト	<div>・個別の支援事例において、転居後の生活支援のために必要なサービスにつないだ。</div> <div>・転居後の民生委員・児童委員と連携をとり、何かあれば連絡いただく事となっている。</div> <div>・大窪南市住のサロンを地区担当と一緒に訪問し、センターの周知を行った。</div>	権利擁護 医療介護連携 包括的継続的	<div>・大久保南団地に転居された方の支援を継続して行っており、生活課題の解決や介護サービスの利用につないだ。</div> <div>・民生委員と連携を行い、気になる事があればセンターに連絡をいただける関係が築けている。</div> <div>・大窪南市住のサロン参加者に向けて、見守りの必要性や、何かあれば連絡いただくよう案内し、地区担当の顔合わせを行い関係性ができた。</div> <div>・サロン代表より、介護予防に関するイベントの依頼があり、企画している。</div>	<div>・大窪北市住は令和9年3月に取り壊しが決定しているが、複合多問題世帯は転居を望んでいないため、支援を求める声はまだあがっていない。</div> <div>・取り壊しが近くなると、支援が必要となる世帯が増加する可能性がある。</div> <div>・大久保南団地は困窮世帯と複合多問題を抱える世帯が多く、地域資源とつながりがなく抱え込んでいる世帯が多い。</div>	<div>・大窪北市住で退居期限内に引っ越しが完了し、転居先で必要な資源とつながる事ができる。</div> <div>・大窪南市住で、サロン参加者や近隣の方の見守りを通じて、支援の必要な人が専門機関につながる。</div> <div>・大久保南団地の住人にセンターの周知ができ、困った時に直接センターに連絡することができる。</div>	<div>・大窪北市住は、市の住宅課が転居に向けた案内を各戸にされており、支援が必要な場合は連絡がもらえるため、様子を見る。</div> <div>・大窪南市住、大久保南団地はボランティアや民生委員の見守りがなされており、センターへの連絡関係ができています。引き続き連携を保ちながら対応していく。</div>	終結	ボランティアや民生委員と個別の支援事例について連携していく中で、支援が必要な時はセンターに連絡をいただける関係性が構築できました。引き続き連携を保ちながら、必要な支援を行ってください。
堂の上	2時だよ全員集合！！	<div>・集会所改修中でも活動が継続できるよう、サロンを訪問し活動状況を把握した。</div> <div>・出前講座などの協力できる事を伝えながら、地区担当との顔合わせを行い、相談しやすい関係を作る。</div> <div>・改修後も安定して開催されている事を確認した。</div>	生活支援体制 総合相談	<div>・サロン関係者への聞き取りや訪問により、集会所の改修中もサロンを開催出来ており、安定して運営できている事が確認できた。</div> <div>・サロン運営メンバーである民生委員と関係構築できており、センターを快く受け入れてくださる関係ができています。</div> <div>・サロン参加者から介護保険の相談あり申請につながるなど、センターの役割を認識してもらったこととなった。</div>	<div>・安定的に自主運営されており、困ったときにセンターに連絡をくれる関係ができている。</div> <div>・古くからの住宅が多く細い路地も多い。土地所有者が不明瞭で悪路になっている箇所もあるが近所付き合いは比較的に維持されている。支援が必要な場合にセンターにつながるよう周知できると良いと思われる。</div>	<div>・自治会内で、センターの周知ができ、困った時にセンターにつながる事ができる。</div> <div>・サロン参加者とセンター職員との顔つなぎができ、サロン参加者を中心に地域の見守りの目が育つ。</div>	<div>・安定した運営と、センターに連絡をくれる関係性ができているので今後はサロンに3職種を交えて訪問しながら、相談しやすい関係を維持する。</div> <div>・訪問の際には、地域の見守りをお願いしながら、様子を見る。</div>	終結	集会所改修中も聞き取りや訪問を継続し、安定して自主運営をされていることが確認でき、サロン参加者からの申請相談に対応することでセンターの役割を認識してもらうことにつながりました。引き続き相談しやすい関係の維持に努めてください。

魚住東中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
新々田	新々田を知り尽くそうプロジェクト	<p>・自治会長と関係を築き、自治会の状況や地域の課題を聞き取った。</p> <p>・民生児童委員に一人暮らし台帳登録者の状況について聞き取った。</p> <p>・現地を訪問し、居住状況等を調査した。</p> <p>・自治会長や民生児童委員とセンターの周知方法について話し合いを行った。</p>	総合相談 生活支援体 認知症	<p>・自治会連絡会にて、自治会長から自治会の活動状況や住民同士のつながり等を聞き取った。</p> <p>・民生児童委員からひとり暮らし台帳登録者や地域の様子等を聞き取った。</p> <p>・地区担当で現地を訪問し、自治会の場所、地形、周辺環境、家屋の様子を観察した。</p> <p>・自治会長、民生児童委員、地区担当で意見交換を行い、自治会長と民生児童委員の関係づくり、地域の課題等について意見交換を行った。</p>	<p>・自治会活動は総会と一斉清掃のみ。住民同士の交流機会が少ないこと、自治会名簿を作成していないことで自治会長自身も地域住民を把握できていなかった。</p> <p>・古い住民はつながりがあるが、新しく造成された住宅地の若い住民の地域とのつながりは希薄であった。</p> <p>・民生児童委員が自治会外の方で、自治会長は地区の民生児童委員を認識していなかった。</p> <p>・民生児童委員は、見守りや防災の観点からも地域のつながりを重視しており、今後自治会とのつながりを築きたいと考えていた。</p>	<p>・自治会長と民生児童委員がつながり、普段から相談し合える関係性にある。</p> <p>・住民自身が自治会内の状況を把握し、今後どのような地域にしたいのか将来像をイメージできる。</p> <p>・日ごろから相談し合える住民のネットワークがあり、必要時には相談先としてセンターに繋がりやすくなる。</p>	<p>・4月の自治会総会にセンター職員が出席し、住民にセンターの紹介を行う。</p> <p>・住民の生活状況やニーズを聞き取るアンケート調査を実施する。</p> <p>・住民座談会を開催し、アンケート結果を自治会員や民生児童委員と共有する。</p>	継続	今年度は自治会連絡会の参加や地区担当の民生児童委員を交えた意見交換会の機会を設けることができ、センターとしての小地域福祉活動を推進するきっかけとなったことは成果として評価できる。一方で住民同士のつながり、生活ニーズ、福祉課題等まで把握するには至っていないため、継続的な地域アプローチを試みながらセンターとして住民主体の支え合いの仕組みづくりを目指したい。
魚住東中学校区	認知症にやさしい町づくりプロジェクト	<p>・圏域内の企業や店舗からオレンジサポーター養成講座の候補先を選定した。</p> <p>・候補先にオレンジサポーター養成講座を働きかけ、認知症の顧客等で困ったことがなかったか聞き取りを行った。</p> <p>・オレンジサポーター養成講座を実施し、正しい知識や対応、相談窓口を周知した。</p>	認知症 生活支援体 一般介護予 権利擁護	<p>・センター周辺の企業、店舗をリストアップし資源把握を行ったが、センターと関係を築けていない店舗が多いことが判明した。</p> <p>・企業、店舗への働きかけを行う手段として、組合等の組織がないか、近隣で店舗を営む民生児童委員から情報収集を行った。</p> <p>・リストアップした店舗を訪問し、センターチラシを手渡し周知活動を行った。</p>	<p>・地域に店舗等を記した地図が設置されており、店舗の数や位置関係を把握できた。</p> <p>・店舗はあるものの、組合等の店舗をつなぐ組織がないため、働きかける場合は個々に行う必要があった。</p> <p>・センターと近隣企業、店舗につながりがなく、オレンジサポーター養成講座の働きかけより先にセンターの周知が必要であった。</p>	<p>・近隣店舗にセンターの役割周知ができ、気になる住民がいた時にセンターにつながるネットワークがある。</p> <p>・センターが認知された後、企業、店舗従業員を対象としたオレンジサポーター養成講座を開催できる。</p>	<p>・センター広報紙や啓発チラシを店舗に配布することで、近隣店舗とコミュニケーションを図り、センターの役割を伝えていく。</p> <p>・認知症対応で困ったなどの事例を相談から拾い上げ具体的な対応に導く。</p>	継続	当該地区はJR魚住駅前のセンターロードを起点に金融機関や様々な商業スペースがあることが地域特性のひとつであるため、この地域の強みを生かした支え合いの仕組みを推進することを再検討したい。

魚住中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No.	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなってほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
魚住中学校区（土山）	困りごとを早期に相談できる体制づくりを目指す	<div>・令和5年度、令和6年度の相談歴を情報システムから把握</div> <div>・民生児童委員、活動代表者、現まちづくり協議会会長へ地域アプローチの目的を説明し、地域の状況について聞き取りを行った。</div> <div>・地区担当の職員がそれぞれ土山地区を歩き、気になる場所を写真に収めるなどレポートを作成し、地区で共有した。</div> <div>・地域のケアマネジャーにも土山地区を知ってもらうためにケアマネ連絡会で土山地区の把握内容を報告した。</div>	生活支援体制 総合相談	<div>・昨年の相談歴を情報システムから把握しキーパーソンへ聞き取りを行い、センター職員も地区把握に努めたが早期にセンターへ相談する体制作りまでは達成できていない。</div>	<div>・昨年度の相談件数、清水校区で162件(新規のみ)内、土山自治会の相談件数8件</div> <div>・地域に自然と集まる場所があった</div> <div>・土山地区は、歴史あるまちでまちの変遷が分かった</div> <div>・地域に定住する外国人労働者が増えてきていることも分かった</div>	住民同士のつながりを広げながら困りごとなどをキーパーソンやセンターに相談する等、住民同士で解決できる体制をつくる	今年度は、キーパーソンへの聞き取りのみで住民への聞き取りが行えなかったため、住民へ聞き取り調査を行い、ニーズを把握する	継続	今年度は土山自治会への地域アプローチを試みたが、昨年度は計画的な地域アプローチができなかったことを踏まえて、当年度は地区職員が①事実を知る（歴史、地形、生活実態など）②現場で考える（地域資源、聞き取り、課題抽出など）を念頭にフィールドワークを行なった。あわせて生活支援コーディネーターが更なる地域アプローチ（民生委員、高年クラブ会長まちづくり協議会会長等）を試みたことで間接的に住民へセンターの存在を知ってもらえることになり成果を得たと評価できる。
錦浦小学校区	地域で認知症の理解を深めよう	<div>・錦浦小学校区の認知症件数を把握した。</div> <div>・錦浦小学校から依頼があり、4年生を対象にオレンジサポーター養成講座を実施した。</div> <div>・西岡自治会と浜谷自治会へ働きかけ、自治会合同のオレンジサポーター養成講座を実施。講座後に明石高専の学生の協力を得てスマホの相談会を開催した。</div>	認知症 一般介護予防	<div>・集いの場からの発信ではなかったが、小学校からの依頼で学校とつながり、小学生に認知症について知ってもらえた。</div> <div>・自治会を超えたつながりが生まれ、明石高専と自治会もつながり交流ができたと同時に認知症の理解を深めることができた</div>	<div>・錦浦小学校区の認知症相談件数は、16件(新規のみ)</div> <div>・錦浦小学校でオレンジサポーター養成講座を実施し、認知症という言葉聞いたことがある児童が多く、今回の講座で認知症についてのイメージができたという児童が多かった。また祖父母との交流がある児童が多かった</div> <div>・地域、明石高専ともにお互いがつながりたいというニーズがあったことが分かった</div> <div>・隣同士の自治会であるが、今回の講座で初めて出会う方が多くおられた</div>	・小学校や自治会内、自治会を超えてネットワークを構築し、多世代交流をしながら最小単位(町内)の地域コミュニティ推進を図る	今回の西岡、浜谷自治会のつながりを活かし、今後も自治会内や自治会を超えたつながり作りを広げ、ネットワークを構築していく	継続	校区内の認知症の理解を深めたく取り組みを進めるも、当初は地域アプローチの機会を得ることが出来ず取り組みが停滞するも、小学校や自治会からオレンジサポーター養成講座開催の要請があるなど取り組みを推進する一歩となった。また西岡、浜谷の両自治会が協働してオレンジサポーター養成講座を企画し、また明石高専のボランティア部も参画するなどし更なる地域ネットワーク構築につながった事は今後の取り組みの指針となったと感じる。

二見中学校区 地域支援報告書（事業報告書）

対象	プロジェクト名、課題No	やったこと、実績、計画した課題①	当てはまる事業	評価（目標を達成できたか？達成状況）	やってみてわかったこと、残った問題②	更にそのその先に最終的にこうなしてほしい（展望、最終目標）③	来年度はこうする④	方針	センター長の講評
二見北小学校区	早期に気づき相談しようプロジェクト	(1)(2)二見北小学校区内（福里地区、市営東二見住宅、二見ハイツ）でサテライト相談を兼ねた健康測定会を実施し、ACP等に関するチラシを配布し周知した。 (3)サテライト相談会は、上西厚生館では毎月のおしゃべり喫茶に合わせて、阪神調剤薬局では上半期に1回栄養相談会に合わせて実施した。 (4)オレンジサポーター養成講座は、二見北子どもカフェと二見小学校4年生を対象に講座を実施し、保護者に向けたお便りも配布することで若い世代に対しても認知症の正しい知識の普及に務めた。	総合相談 一般介護予防 医療介護連携 権利擁護 総合相談 生活支援体制整備 認知症	・高齢者虐待ケースの傾向では、R4年度、R5年度は問題が重度化してから相談が入ることが多かったが、R6年度は、重度化する前の段階での通報が増加している。 ・サテライト相談会での相談件数は少なかったが、必要に応じアウトリーチが出来、適切に相談対応に繋がっていた。 ・子ども向けのオレンジサポーター養成講座を受けた児童が、家庭内で内容を共有をしていたという報告があり、子どもを通して、若い世代への啓発が出来た。	(1)(2)ケースの傾向で「家族の介護負担の増大によるもの」が多数を占めており、その背景として、認知症の理解不足や、介護の仕方が分からないなどの理由があった。 (3)上西厚生館のサテライト相談に関しては、厚生館職員との連携強化が図れた事により、相談に繋がる体制があり、必要に応じてアウトリーチが出来ていること、阪神調剤薬局においても介護保険や必要な制度に繋がっている人が多い事や事業所がセンターの周知活動に協力してくれていること等により、サテライト実施のニーズが少なくなっている。 (4)オレンジサポーター養成講座の回数が減少しており、地域へ実施のアプローチを行っていく必要がある。	元気な頃から、自分で意思決定や判断ができなくなった時の事を本人を含む家族が考える機会を持つことで、問題が重度化する前に専門の機関へ相談することができ、住み慣れた地域で本人らしく過ごすことができる。	・認知症の正しい理解や、介護の方法の周知を行うとともに、介護者が抱え込まないよう、相談ができる場を作るなど、予防的な啓発を実施していく。 ・高齢者虐待の早期発見に繋がるよう、関係機関や地域へ高齢者虐待防止について普及・啓発を行っていく。 ・地域住民が認知症に早期に気づいたり、ご自身で今後のことを考え備えることが出来るよう、ACPについて啓発していく。	継続	・センターが遠くにある地理的な問題はあるものの、今後は二見北小学校区に絞らず、中学校区で展開してはどうでしょうか。 ・サテライト、健康教室、健康測定会の効果的な開催場所についても分析を続け、より効果的な地域又は相談が上がりづらい地域に注目しこれまでの試みを展開してもらうことで、より早期に相談に繋がっていくと思われます。
二見中学校区	ミックスカフェ立ち上げプロジェクト	会場、協力者の選定 他校区の活動見学（マローネ、だるま会） コアメンバー会議（認知症当事者の家族、支援団体、総合支援センター）、実務者会議の実施	生活支援体制整備 認知症	当事者・家族の声を聞き、合意形成を図りながら検討を行った。また、活動の趣旨説明を行い、協力者を募ることができた。 他校区の活動を見学し、事業の参考にした。 まずはコアメンバーで協議を行い、実務者会議を開催することができた。	会場については、仮の候補地が決定した。活動の名称、役割分担等の詳細については次年度に検討を進める。 活動を継続していく為に、参加者のニーズを掴むことの重要性を再認識した。 協力者によって意向が異なる部分があるので、合意形成しながら協議を進めていく必要がある。	次年度、住民や専門職が協働し、二見地区に新たな居場所が立ち上がる。 住民が主体となり、地域の専門職の協力を得て、居場所を自主運営できる。 参加者の意見を取り上げながら運営していくことで、地域のニーズに合った活動を実施していく。	実務者会議を継続開催し、居場所立ち上げに向けた協議を行う。 会場の使用許可、運営費用の確認を行い、更に協力者を募る必要があれば調整を行う。 居場所を立ち上げ、PDCAサイクルで運営できるように支援を行う。	継続	長期的な計画のため、問題提起となった「男性介護者が多い」「認知症や生きにくさを抱える人に関する相談が多い」点から始まったことを忘れずに進めていきましょう。まずはこの問題点についてのキーマン（協力が得られる方）を探しだし、少人数のコアメンバーを結成し、協議を重ねながら少しずつ形を見つけていってください。 集まることを目的とせず、コアメンバーで協議をする際は、必ずセンター内で戦略会議を開催したうえで、短期目標を設定しながら居場所の模索をしていってください。